愛知淑徳大学論集 ―コミュニケーション学部・心理学研究科篇― 第10号 2010 71－82

「違いをともに生きる」ために

――シェイマス・ヒーニーの民族的アイデンティティ――

小沢 茂[※1]

「愛知県はすでに日本人だけのものではなくなっていると思いました」―これは、本学の現代GP採用プログラム "Multiculturalism in Aichi" 受講生の声である。愛知県には大手自動車会社があることも起因して，外国人労働者が多い。「派遣切り」騒動の際，多くの日系ブラジル人労働者が雇い止め通知を受け，デモ行進をしていたのも記憶に新しいところである。日系ブラジル人だけではない。街角でも，中国語や韓国語を聞く機会がたいへん多くなってきた。小学校などでは，クラスの半数が外国人というケースもまれではないという。ことは愛知県だけにとどまるものではない。東京にはすでにチャイナタウンができつつあると聞く。少子化による日本人の人口減も手伝って，今後ますます労働者や留学生といった形で外国人が流入してくることはほとんど確実である。民主党が提出する外国人参政権法案が認められれば，日本国籍を持たなくても政治に参加し，日本の舵取りに加わることができるようになる。先の学生の言葉を敷衍して言えば，日本列島が日本人だけのものでなくなる日も近いというわけだ。

多文化を背景にした多くの人種，民族が同じ居住区で生活することになると，どうしても摩擦が生じてくる。それぞれの育った文化的背景が異なるからである。現に，外国人が住民の半数を占める団地では，日本人と外国人の間に深刻な対立が生じたこともある。同じような問題は，今後増加の一途をたどることになるであろう。

日本列島が日本人だけのものでなくなる時代には，いかにして「外国人」と共に，平和に生きるかが問われることになる。日本人だけに通用する考え方を捨て，異なる文化背景を持つ人々と共存する，すなわち「違いを共に生きる」ことが求められるのである。このことは，日本人としてのアイデンティティを完全に捨てることを意味するものではない。おのおののローカルなアイデンティティを保持しつつ，よりグローバルな見方をとることが必要なのだ。

日本の今後を考える上で，北アイルランドの状況は，重要な示唆を与えてくれる。日本の未来と北アイルランドの過去が類似しているからである。北アイルランドは，広く知られているように，北アイルランド紛争が長年にわたって繰り広げられてきた場所である。そして，その原因とは，もともと住み着いていたアイルランドの住民と，新たに入植してきた英国の住民との間の摩擦であった。「外国人」流入の起因が帝国主義による植民地拡大であったという点で相違はあるものの，土着の人々と外来の民族の対立，共存という点では，日本がこれから経験するであろう状況と同じ図式である。北アイルランドは現在，長年のテロの応酬に終止符を打ち，和解へと至っている。多文化共生社会の実現である。本論では，こうした紛争の中で詩作を始め，和解の目撃者ともなった北

※1 外国語教育センター

アイルランドの詩人，シェイマス・ヒーニーの作品に見られるアイデンティティの変遷をたどり，「違いを共に生きる」ために求められるアイデンティティのあり方について考察する。

1

本論の鍵概念として，ハイブリディティ (hybridity) と，多様性のある統合 (unity with diversity) があげられる。ハイブリディティは多様性のある統合の一歩手前の状態であり，ハイブリディティを経て多様性のある統合へと至る。ハイブリディティとは異種のものが単に共通の空間で暮らすことであり，多様性のある統合とは，異種のもの同士がより深く理解し合う「多文化共生理解」のことと考えてよいだろう。

ハイブリディティと，多様性のある統合という，グローバル化のプロセスにおける二つの異なった段階は，ヒーニーの作品から，いくつかの有意義な示唆を与える形で読み取ることができるように思われる。その有意義な示唆とは，現実認識のあり方，少数者の復権のあり方，階級的問題の根深さ，そして，アイデンティティそのものの複雑性，脆弱性などである。

北アイルランドのカトリックの農家に生まれ育った詩人シェイマス・ヒーニーにとって，ハイブリディティの克服は，いくつかの点で重要な意味を持っていた。それはまず，農家を継ぐべき者でありながら (ヒーニーは長男である) 詩人という知識階級の生き方を選んだという事実の中に，階級問のハイブリディティとして存在した。ヒーニーは，散文集*Preoccupations*の中で，周囲が自分に向ける視線に戸惑ったことを記している。また，別種のハイブリディティは，宗教的な存在として現れた。ヒーニーの家の近くを流れる川により，プロテスタントとカトリックが分けられていたため，ヒーニーは子ども時代，両者に接する形で成長せざるを得なかった。彼は "Two buckets were easier carried than one. I grew up in between." と，詩 "Terminus" でうたっている。同じことが，工業化と農業の異種混合という点でも見ることができるであろう。ヒーニーの故郷は，伝統的な農業と，リネン工場という産業革命の産物とが混在する場所である。ヒーニーはまさに「ハイブリディティ」を出発点としていたと考えられる。

2

人間はまず家庭の中でアイデンティティを確立するものであるといってよい。伝統的な農家の場合，アイデンティティは自動的に決まってくる。農家の息子は多くの場合農業を継ぐからである。しかし，ヒーニーは違っていた。その意味では，ヒーニーの第一詩集の冒頭に置かれた「土を掘る」(Digging) は，ヒーニーがハイブリディティを克服した (もしくは，しようとした) 最初のケースを見せてくれる。この作品では，語り手は父親や祖父が代々「土を掘る」作業，すなわち農業に秀でていたことを語った後，次のようにうたう。

But I've no spade to follow men like them.

Between my finger and my thumb
The squat pen rests.

I'll dig with it. (28-31)

ここでは，ヒーニーは，鋤 (労働者階級) と，ペン (知識人階級) という，二つの異質なものを融合しようとしている。これは，ローカルなアイデンティティを保持したままユニヴァーサルなアイデンティティを獲得するという理論に通じるものがある。ヒーニーは農作業を完全に捨てたわけではなく，直喩のレベルにおいて農家のアイデンティティを保持しているのである。というのも，ヴェンドラーがいうように「ペンは探求と発掘の道具として用いられることとなり，祖父が掘り起こした泥炭 (燃料として使われた) のような暖かさや，父親が掘り起こしたじゃがいものような滋養を生み出すことになった」(29) からだ。

3

家庭を出た人間は，社会の中でアイデンティティを確立しなければならない。宗教的に複雑な事情のある北アイルランドでは，自らの宗教的 (民族的) アイデンティティの確立が急務である。なんとなれば，日常的に，否応なしに，自分がカトリックであることを認識せざるを得ないからだ。"Singing School" の "The Ministry of Fear" で描かれているように，北アイルランドは宗教的ハイブリディティが色濃く残る地域である。

All moonlight and a scent of hay, policemen
Swung their crimson flashlamps, crowding round
The car like black cattle, snuffing and pointing
The muzzle of a sten-gun in my eye:
"What's your name, driver?"
"Seamus..."
Seamus? (52-57)

「シェイマス」はカトリックの名前であり，北アイルランドの警官はたいていがプロテスタントである。このように，不安と潜在的な敵意の見られる対応は，両者の間の対立の根深さを示している。

おそらくは，社会的アイデンティティが確立していない青年にとっては，先に挙げた詩にあるような，相手 (プロテスタント) から受ける敵意に満ちた対応が，社会的アイデンティティ確立の第一歩となったであろう。自分はプロテスタントから敵視される存在，カトリックである，というわけだ。そして，このような敵対的関係から生み出されたアイデンティティは，自然，相手に対する敵意に満ちた，どちらかといえば「右よりの」「過激な」ものとなる。ヒーニーの社会的アイデンティティの第一歩は，ステレオタイプという形を取って，カトリックの一員という「複数形としての自分」を受け入れるものであった。

There, in the corner, staring at his drink.
The cap juts like a gantry's crossbeam,

Cowling plated forehead and sledgehead jaw.
Speech is clamped in the lips' vice.

That fist would drop a hammer on a Catholic-
Oh yes, that kind of thing could start again. (1-6)

この "Docker" という作品は，働き者で，寡黙で，カトリック教徒に強い敵意を持っている，という，北アイルランドでのプロテスタントに対するステレオタイプを体現している。この作品では，まだ「統合」の可能性は見られず，敵対する者同士が隣接して暮らしているという，油断も隙もない「ハイブリディティ」を見ることができる。

しかし，詩作とは必然的に，自らが認識した現実を紙の上に描き出すことであるから，先入観は，たとえある程度根拠があり，現実を反映しているものであるとしても，盲目的に受け入れるのは，あまりよいことではない。ヒーニーはこうしたステレオタイプに浸ることなく，集団的アイデンティティから離れ，融和の可能性を見いだすような，より穏健な，「合法的リパブリカン」(Constitutional Republican) のアイデンティティを確立していっているようだ。

In a khaki shirt and brass-buckled belt, a demobbed neighbour leaned against our jamb. My father jingled silver deep in both pockets and laughed when the big clicking rosary beads were produced.
"Did they make a papish of you over there?"
"Oh, damn the fear! I stole them for you, Paddy, off the pope's dresser when his back was turned."
"You could harness a donkey with them."
Their laughter sailed above my head, a hoarse clamour, two big nervous birds dipping and lifting, making trial runs over a territory. (45)

これは，連作散文詩 "Stations" のひとつ，"Trial Runs" という作品である。復員してきた隣人とはプロテスタントの隣人であるから，カトリックのヒーニー一家との共存は「ハイブリディティ」を形成しているわけであるが，ここでは，両者間の交流が描かれている。これは「試験飛行」というタイトルから，あるいは，"two big nervous birds dipping and lifting, making trial runs over a territory." という，最後の部分から読み取れるように，恒久的な交流ではなく，試験的な，不安に満ちたものである。しかし，それでもなお，敵・味方という単純な二項対立を離脱する可能性が暗示されていると考えられるだろう。戦争中にロザリオを持って帰ってくるという事実は，プロテスタントがカトリックの信仰に一応の理解を示していることを表している。教皇のタンスからものを盗むというジョークはプロテスタントならではのもので，ヒーニーの隣人は決して自らの宗教的アイデンティティを捨てているわけではないが，完全に敵対しているわけでもない。これは「多様性ある統一」に対する「試験飛行」であると言えるだろう。

「ハイブリディティ」から「多様性ある統一」への移行が現れているもう一つの例は，直接的なタイトルを持つ "The Other Side" という作品である。これは，"Trial Runs" で登場するプロテスタントの隣人との関係を扱った，三つの作品からなっている連作で，第一部，第二部では，隣人は "It's poor as Lazarus, that ground," (4) や "Your side of the house, I believe, / hardly rule by the book at all." (8-9) などと言って，カトリックのヒーニー一家に敵対的な姿勢をとる。しかし，第三部では，隣人は，夕方，ヒーニー一家を訪れ，連梼が終わるのを待って，ドアをノックする。

> [...] "A right-looking night,"
> he might say, "I was dandering by
> and says I, I might as well call." (7-9)

さらに，語り手 (成人した詩人) は，家の外にいて，この隣人を眺めている自分を空想して，詩を終える。

> But now I stand behind him
> in the dark yard, in the moan of prayers.
> He puts a hand in a pocket
>
> [...]
>
> Should I slip away, I wonder,
> or go up and touch his shoulder
> and talk about the weather
>
> or the price of grass-seed? (10-12, 16-19)

"But now" という表現から，この語り手は成人した詩人であり，この出来事を回想していることがわかる。"Trial Runs" がどちらかといえばプロテスタント側 (多数派) からのアプローチであったのに対し，この作品では，カトリック側 (少数派) からの歩み寄りも見られ，双方向からの「統一」の可能性が示される。語り手は "slip away" という行為 (孤立主義，排他的断絶) と，"talk about the weather / or the price of grass-seed" という行為 (最低限の交流) の間で揺れ動いている。「抜け出す」選択肢よりも「天気」や「牧草の種」の話の方が後に書かれているため，読者にとっては交流の可能性が強く印象づけられることになるだろう。

4

ハイブリディティから多様性ある統一への移行にとって最も重要なポイントの一つは，現実の正

しい認識であろう。“Docker” がいささかステレオタイプ的な見方をしているのに対し，“The Other Side” や “Trial Runs” が，プロテスタントの複雑性や和解への可能性を描いているのは，隣人であるがゆえに，接する機会も多く，より正確な認識が可能であったからだと思われる。
現実の正しい認識には，相手だけではなく，自分自身を知ることも含まれる。「彼れを知り己れを知らば，百戦して殆うからず」と『孫子』は言っているが，相手がどのような人間で，自分がどのような人間なのか，そして，彼我の間にどのような共通点があり，どのような相違点があるのか，これらのことを認識することにより，自らのアイデンティティを保持しつつも，他者に理解を示し，共生することができるようになると思われる。自分自身を知ることは，相手を知ることよりも，時として難しくなることがある。ややもすれば，人は己の弱点に目をつぶり，誇大評価をしがちであるからだ。

しかし，ヒーニーの場合，回り道とも言える方法で，巧みに自らの暗部，自らの民族の暗部に鋭くメスを入れていく。一九七〇年代，過熱する北アイルランド紛争の中で，ヒーニーは一見奇妙に見えるが，北アイルランドそのものを描くのではなく，デンマークや北ドイツで出土した沼沢地遺体（ボグと呼ばれる沼沢地では強酸性の水分のため，埋まった遺体は腐敗を免れ，死亡時の姿をかなりとどめて出土する）を描くことによって，北アイルランド問題にアプローチしようとした。この試みの中では，ヒーニーは自ら（と，自らの民族）が持っている，暴力への傾向という暗黒面から目を背けることなく暴き出している。

ヒーニーが「己を知る」試みを行っている典型的な例の一つとして挙げられるのが “Punishment” である。この作品では，語り手は，古代ゲルマン社会で，姦通を行ったために処刑されたとされる「ウィンドビーの娘」と，現代北アイルランド社会で，治安維持のために駐留していたイギリス兵と関係したことに対して，暫定IRAによって羽毛をまぶされ，タールを塗られるというリンチをうけたカトリックの女性とを “sisters” 「姉妹たち」という隠喩で結びつける。そして，詩は次のように終わるのだ。

> [I] who would connive
> in civilized outrage
> yet understand the exact
> and tribal, intimate revenge. (41-44)

ヒーニーはここでは「己を知って」いる。自分の中に “understand the exact / and tribal, intimate revenge” という姿勢があることを告白しているためである。これは，部族間（ここでは，カトリックが一個の『部族』となっている）に，暴力によって秩序を維持するという暗黒面を持っていることを明らかにするという点で，一種の自己批判になっている。

ヒーニーが “Punishment” で行っているのは，単に自分自身の中に暴力的な要素があるという自己批判だけではなく，よりスケールの大きな，汎ヨーロッパ的とも言ってよい視点である。というのも，この作品では，古代ゲルマンの処刑と，現代北アイルランドの処刑が類似したものとして提示されているからだ。これは，暴力の普遍性にもつながる。ヘレン・ヴェンドラーは，この点に

ついて，次のように指摘している。

> This was a way of saying that other countries have religious differences without religious wars; that other countries endure deep rifts between classes without resorting to murder; that other countries are postcolonial without continuing to avenge grievances dating from the sixteenth century. Can it be, Heaney proposes, that what we are seeing is not Catholics against Protestants, or rich against poor, or loyalist against nationalist, but rather a generalized cultural approval of violence, dating back many centuries? (51)

ここでいう「文化」とは，単に北アイルランドのカトリックというローカルな文化ではなく，ヨーロッパ全体の文化である。

ヒーニーの視点は，ハイブリディティから多様性ある統一への移行のプロセスで，重要な意義を持つことになる。なんとなれば，ハイブリディティとは，定義として，異種のものが混交することを意味するからである。しかし，それら異種と呼ばれているものに，実は根底に共通の文化的背景があったとすればどうだろうか。文化的な暴力肯定の傾向は，敵，味方とも，双方に存在するものであるなら，そこにはプロパガンダにありがちな，単純な善悪の図式は成り立たない。敵にも欠点はあるが，我々にも欠点はある。このように，「己を知る」ことにより，多様性ある統一の第一歩が築かれるのではないだろうか。

5

事実，現実を正確に認識すればするほど，ヒーニーにとって，単純な二項対立が不可能なものになっていく。たとえば，「アイルランド性」とはいったい何なのか。アイルランド的なものはアイルランドにしかないのだろうか。詩集*Field Work*には，多くのエレジーが含まれているが，ここでは「アイルランド性」の様々な側面に光が当たっている。たとえば，ショーン・アームストロング（“A Postcard from North Antrim” に登場する）は，アイルランド人だが，アメリカに住んでいた。逆に，ロバート・ロウエル（“Elegy” に登場）は，アメリカ人だが，アイルランドで詩作をしていた。フランシス・レドウィッジ（“In Memoriam Francis Ledwidge” で取り上げられている）は，カトリックのアイルランド人だが，英国のために第一次大戦に参戦した。このような多くのエレジーは，「アイルランド人」もしくは「アイルランドらしさ」というステレオタイプが幻想であることを我々に訴えているかのようだ。一面的で単一なアイリッシュ・アイデンティティ，カトリック・アイデンティティなどというものは存在しないのである。

集団の中で一枚岩にならないというだけではない。一個の個人の中ですら，多面性を見ることができる。フランシス・レドウィッジに捧げられたエレジー “In Memoriam Francis Ledwidge” の中では，レドウィッジは，女の子に言い寄ったりする文学的な少年，英国兵，悩めるアイルランド人など，さまざまなアイデンティティを持っている。いったいどれが彼の「本当の」アイデンティティなのか。語り手は詩の結末部分で “In you, our dead enigma, all the strains / Criss-cross in useless equilibrium” と問いかける。我々はややもすればレッテルを貼って見てしまいがちだが，

集団内部でも様々な側面があり，個人の内部ですら様々な「顔」があるのだ。

以上で見たような，現実の正確な認識にともなう単一的な味方の消滅は，ハイブリディティという概念を別の角度から解消していく効果を持っている。ハイブリディティは異種の集団同士が共存し交流することを意味するから，異種の集団が数多く混在することが前提となるはずだ。この「異種の集団」内部では，ある程度の整合性がとれていることが必要である。しかし現実の正しい認識が進むにつれて，そうした異種の集団が必ずしも単一のアイデンティティを持っていないこと，否，それらの集団に属しているはずの個人の中にすら，様々な，時として相反する（アイルランドのカトリックなのに英国兵として戦うなど）要素があることが判明してくる。こうして，ハイブリディティの前提である，集団内部の統一性が危ういものになっていくのである。

6

ハイブリディティの克服にとって，今ひとつ重要な要素は，自己憐憫と勝利への幻想というモチーフである。少数派は，自分たちが多数派によって不当に差別され，虐げられているという認識を必要以上に持ちがちであり，自らの惨状を多数派や権力側に転嫁する傾向がある。これはもちろん現実の正確な認識の対極にあるものであり，単一的なステレオタイプへと導く遠因の一つにもなる。ヒーニーは，この現象を“Hercules and Antaeus”という作品で表現している。

Hercules lifts his arms
in a remorseless V,
his triumph unassailed
by the powers he has shaken

and lifts and banks Antaeus
high as a profiled ridge,
a sleeping giant,
pap for the dispossessed. (25-32)

ここでは，アンタイオスはアイルランドの寓意であり，ヘラクレスは英国の寓意である。アンタイオスが“a sleeping giant”―つまり，いつかは目覚めて，ヘラクレスを打倒してくれるだろうという概念―であるという認識は，しかし，語り手によって“pap for the dispossessed”「禁治産者たちにとっての乳首」と，手厳しく表現されている。禁治産者たちはまるで子どものように，アンタイオスの復活という幻想，夢を，おしゃぶりのようにして現実から逃避しているというわけである。

7

ヒーニーは，すでに見たように，カトリックとプロテスタントという局地的なものでなく，汎ヨーロッパ的な現象を見据えて詩作をするようになった。やがて，彼は，さらにスケールを大きくし，

地球全体をも視野に入れるような，文字通りのグローバルなアイデンティティを手に入れることになる。“Alphabets” という作品では，ヒーニーは大気圏を飛び出した宇宙飛行士という仮面をかぶって語る。

Yet shape-note language, absolute on air
As Constantine's sky-lettered IN HOC SIGNO
Can still command him; or the necromancer

Who would hang from the domed ceiling of his house
A figure of the world with colours in it
So that the figure of the universe
And “not just single things” would meet his sight

When he walked abroad. As from his small window
The astronaut sees all he has sprung from,
The risen, aqueous, singular, lucent O
Like a magnified and buoyand ovum – (50-60)

ここでは，“shape-note language” という，一種の象徴的な言語によって，個々の事物と “the figure of the universe”「宇宙全体の姿」を結びつけることができる語り手の姿が描かれている。そして，これに続く部分では，

Or like my own wide pre-reflective stare
All agog at the plasterer on his ladder
Skimming our gable and writing our name there
With his trowel point, letter by strange letter. (61-64)

と，地球と自分の目とが重ねられている。この最後のスタンザでは，ヒーニーのルーツとなった自らの家，そして家の名前（ヒーニー）に言及されているから，イメージとしては，地球全体と，少年時代のヒーニーとが重なり合った形で読者の印象に残ることになろう。これは，ローカルなものとグローバルなものとの融合である。ヒーニーは決して自らの農家のアイデンティティを捨てたわけではない。それは彼の起源が農家の風景にあることに基づいている。しかし，彼は今，日常的世界をも大局的に見ることができるようになったのである。

日常的世界を大局的に見るとは，いったいどういうことか。“Thimble” という作品がその一例を示してくれる。タイトルにもあるように，小さな指ぬきを扱ったこの作品では，指ぬきの価値が様々に描かれる。ポンペイでは，絵の具の入れ物として使われていた。カトリックの聖遺物 “Adaman's Thimble” としてあがめられていたこともあった。そして，現在は，“a nipple-cap”

として用いられている。この作品は，指ぬきのような，ごく日常的な，ありふれた物体からでも，様々な解釈が生まれ，価値観が生まれることを示している。物質，物体は単一である。この作品は，その物体にどのような意味を与えるのが「絶対的に正しい」のかを主張しているのではない。それぞれの解釈はそれぞれに意味を持ち，生活の一部となっているのだから，完全に否定されるべきものではない。われわれが取るべき姿勢は，己の解釈のみが絶対であるという一元論的見方ではなく，他の解釈，他の意味づけも可能であるという多元論的な見方なのである。これは，自らのアイデンティティを喪失することではない。自分の解釈は自分の解釈として保持しつつ，他の見解にも寛容になる，ということであって，これが多様性ある統一の第一歩であるように思われる。グローバルスタンダードと称してアメリカンスタンダードを広めたり，進歩，改革の名の下に，地域性を廃して「東京スタンダード」を持ち込んだりする行為は，アダマンの指ぬきとしてあがめている人々に対して絵の具の入れ物として無理矢理使わせるようなもので，よくない。

8

そうはいっても，長年対立してきた陣営間で，「多様性ある統一」が実現するのはきわめて難しかろう。ヒーニーの，この理想の実現に対する考えは両義的なものである。一九九〇年代に入って，北アイルランドには和平が開かれた。その後も何度か停戦が破られたが，二〇〇九年十月現在，一応の平穏を見ている。この和平に対して，ヒーニーはいくつかの反応を作品として残したが，その中でもよく言及されるのが，“Mycenae Lookout” である。ギリシア悲劇 *Agamemnon* の枠組みを借りて，和平に対する希望と，その後の流血を，ヒーニーが得意とする水のモチーフを用いて両義的に描いた作品だ。語り手は，詩の終盤で，次のような幻想を見る。

And a far-off, in a hilly, ominous place,

Small crowds of people watching as a man
Jumped a fresh earth-wall and another ran
Amorously, it seemed, to strike him down. (21-24)

これはエロスとタナトスとが融合した，おそらくは人類に共通の暴力的な願望を通して，和平が破られ，再び動乱の時代が来る予感を描いたものである。一方，このような暴力的イメージを持ちながらも，この作品は次のように終わる。

like discharged soldiers testing the safe ground,

finders, keepers, seers of fresh water
in the bountiful round mouths of iron pumps
and gushing taps. (33-36)

この水のイメージは，ヒーニーにとって，想像力や起源を意味する重要なモチーフである。*Preoccupations*の中で，彼は次のように書いている。

> There the pump stands, a slender, iron idol, snouted, helmeted...I remember...men coming to sink the shaft of the pump...That pump marked an original descent into earth, sand, gravel, water. It centred and staked the imagination, made its foundation the foundation of the *omphalos* itself. (17, 20)

オンファロスとは大地のへそを意味する，世界の中心，起源を意味する言葉である。従って，この新鮮な水は肯定的な意味を持ちうる。ポンプから吹き出る水はヒーニーの場合詩作のメタファであり，これまで見てきたように，ヒーニーの作品の特徴は「彼を知り，己を知る」ことであり，その結果は肯定的なものだったからである。こうして，ヒーニーはきわめて両義的な姿勢をとっている一つまり，和平は破られ，再び血で血を洗う「ハイブリディティ」の時代が来るのか，あるいは，「多様性ある統一」の時代が来るのか，という二つの間で揺れているのである。(ただ，"The Other Side" 同様，肯定的な可能性の方が後に来ているため，読者には肯定的な印象を与える)。

ヒーニーが "Mycenae Lookout" を書いた時期は，世界的にも大きな動きのあった時期であった。ヒーニーは，ネルソン・マンデラの釈放，ベルリンの壁の崩壊などに大きな影響を受けたと語っている。この時期に書かれたのが，ギリシア悲劇*Philoctetes*の翻案*The Cure at Troy*であった。ギリシア軍に離れ島に置き去りにされたピロクテテスは，最終的に迎えに来たオデュッセウスと和解し，トロイ戦争に参加することになる。この作品の最終部で，コロスは次のようにうたう。

> Suspect too much sweet talk
> But never close your mind.
> It was a fortunate wind
> That blew me here. I leave
> Half-ready to believe
> That a crippled trust might walk
>
> And the half-true rhyme is love.

ここでは，"Mycenae Lookout" よりも積極的に，「多様性ある統一」に向かうベクトルが強く打ち出されている。"never close your mind" とは，初期のころのステレオタイプ的な見方に代表されるような，排他的敵対心を捨てることを言っている。これは同時に，ハイブリディティの否定でもある。最終的に到達する「多様性ある統一」とは，ヒーニーによれば，half-true rhyme (部分的な同調) であった。これはもちろん自らのアイデンティティを完全に捨て去り，多数派のアイデンティティに完全に同調するfull-rhymeではない。しかし，そうかといって，完全に相手と対立するようなものでもないのだ。少数派の復権という文脈で言えば，同調しているのはグローバルな

アイデンティティであり，同調していないのはローカルなアイデンティティであると考えることができるだろう。

現在，時代は大きな変革の時を迎えている。9.11テロの後の作品“Anything Can Happen”に見られるように，かつて覇権を唱えたアメリカ帝国主義もいささか斜陽の感がある。高いものが低くなり，低いものが高くなりうる変動の時代である。少数派が復権し，多数派が失墜しうる激動の時代の中で，我々はヒーニーから何を学びうるだろうか。第一に，ステレオタイプ，偏見を捨て，「彼を知り己を知る」こと，特に，己の弱さや醜さを直視することであろう。そして，単一の事実に対してさまざまな解釈がありうることを，—“Thimble”で見たように—想像力の助けを借りて認識することである。こうしたことはまず，ヒーニーが“The Other Side”の隣人に対して行ったように，現実を先入観なしで観察すること，さらに，“Punishment”で行ったように，過去の歴史，考古学から過去の人類の過ちを分析すること，などである。*The Cure at Troy*には，“Call miracle self-healing: / The utter, self-revealing / Double-take of feeling”という一節がある。自己憐憫，根拠のない勝利への神話的幻想，先入観に基づいた敵対心，自己の正当化やよこしまな願望の抑圧，これらはすべて，自分で自分を苦しめるものである。それらの行為によって肯定的な結果が得られないからである。しかし，それらに直面するのは難しい。とりわけ，戦争，紛争の最中では，まさに「奇跡」といってよい。「奇跡」は天から降ってくるものでも，地から沸いてくるものでもなく，自分自身で起こすものである。激動の二十一世紀，「多様性ある統一」の実現も一種の奇跡であろう。この奇跡を達成できるかどうかは我々自身にかかっているのである。

Works Cited

Corcoran, N. 1998. *The poetry of Seamus Heaney*. London: Faber

Glob, P. V. 1969. *The bog people: iron-age man preserved*. (R. L. S. Bruce-Mitford, Trans.). Ithaca: Cornell UP.

Heaney, S. 1966. *Death of a naturalist*. London: Faber.

Heaney, S. 1969. *Door into the Dark*. London: Faber.

Heaney, S. 1972. *Wintering out*. London: Faber.

Heaney, S. 1975. *North*. London: Faber.

Heaney, S. 1980. *Preoccupations*. London: Faber.

Heaney, S. 1987. *The Haw Lantern*. London: Faber.

Heaney, S. 1991. *The Cure at Troy*. London: Faber.

Heaney, S. 1996. *The Spirit Level*. London: Faber.

Heaney, S. 2006. *District and Circle*. London: Faber.

Ozawa, S. 2009. *The Poetics of Symbiosis: Reading Seamus Heaney's Major Works*: Sankeisha.

Vendler, H. 1998. *Seamus Heaney*. Cambridge: Harvard UP.